

氏名	浅野 友之
学位の種類	博士（体育科学）
学位記番号	博甲第 8223 号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	アスリートのコツ獲得過程に伴う個性化に関する研究

主査	筑波大学教授	博士（体育科学）	中込四郎
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	坂入洋右
副査	筑波大学教授	博士（工学）	高木英樹
副査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	佐野 淳

論文の内容の要旨

浅野友之氏の博士学位論文は、アスリートのコツ獲得過程に伴う個性化について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

1. 論文の目的

アスリートのコツ獲得体験がパフォーマンス向上のみならず、彼らの人格発達においても重要な意味を持つことがこれまで示唆されてきているが、実証的な検討を行った研究を認めることができない。そこで、著者は、アスリートのコツ獲得に伴う人格形成を「個性化の過程（“自分らしさ”を探求し、表現していく過程）」と捉え、以下の検討課題を通してコツ獲得体験におけるパフォーマンス向上に向けた取り組み（外的な側面）と、彼らが自分らしさを発揮していく個性化の過程（内的な側面）の2側面から、それらの関係性について明らかにすることを目的として一連の検討課題に取り組んでいる。

2. 論文の概要

上記の目的を達成するために次の5つの下位検討課題を設定している。

(1) 元トップアスリートの競技ヒストリーにおけるコツ獲得体験の特徴、(2) アスリートのコツ獲得におけるプロセスモデルの提案、(3) プロセスモデルの精緻化とコツ獲得体験に伴う心理的变化の特徴、(4) アスリートのコツ獲得体験がその後のキャリアにおける取り組みに及ぼす影響、そして(5) 「能の極意」獲得過程に伴う個性化過程の検討：世阿弥の伝記分析を通して、である。以下では、これらの下位検討課題にそって本論文の概要を述べる。

(1) 国際大会レベルで活躍した元トップアスリートの「コツ獲得体験」に関する阿江ほか(2001；2002；2003；2004)による面接調査データ55事例を分析資料とした。その結果、①アスリートにとってのコツは、アスリート固有の【感覚】や【運動方略】として把握されている、②コツ獲得前の状況・背景要因として、【パフォーマンスの停滞】、【競技水準・競技環境の変化】がきっかけとなることが多い、

③彼らのコツは課題解決における“動きの効率化”を目指したものであり、その獲得のために独自の試行錯誤が行われている、④コツ獲得後は【動き・パフォーマンス面における変化】といった外的な変化と同期して【技・動きに対する認知の変化】のような内的な変化が認められる、といった結果を得ている。(2) アスリートのコツ獲得過程に伴う個性化を検討していく上での作業仮説の生成を目的として、上記の資料(阿江ほか)の中でもコツ獲得プロセスについて詳細な言語化がなされているデータ 20 事例を対象として、M-GTA を用いた分析を行っている。その結果、コツを獲得後の【パフォーマンス面における変化】が、アスリートの内面にも大きな影響を与え、コツ獲得によるパフォーマンスの向上は【心理面における変化】へとつながるプロセスを明らかにしている。(3) 検討課題 2 で提案されたモデルの精緻化、ならびにコツ獲得体験に伴う心理変容の特徴を 3 名の調査面接事例を通して明らかにしている。その結果、コツ獲得の体験に伴って、「主体性の涵養」、「競技の世界における自己実現」、「コツ獲得後の取り組みにつながるベースの形成」といった心理変容の特徴を明らかにしている。(4) 本課題では、それまでの研究における仮説検証と位置づけると同時に、アスリートのコツ獲得体験における個性化の過程、及びそのような体験が彼らのその後の生き方や取り組みにおいてどのように活かされているのかを検討している。その結果、アスリートのコツ獲得体験には①コツ獲得過程における“独自性・個性”の探求、②動きを通じた“自分らしさ”の表現、③その後の取り組みの中で活かされるコツ獲得体験、といった意味が内包されていることを明らかにしている。さらにそのような体験がその後のキャリアにおける取り組みにおいても重要な意味を持つことを示唆している。(5) これまで明らかにしたアスリートのコツ獲得プロセスモデルの妥当性や、コツ獲得における現実適応と個性化の関連をより多角的な視点から検討を加えることを目的として、能楽の大成者として知られる世阿弥の伝書とその関連文献を分析資料とした伝記分析を行っている。その結果、世阿弥の能楽論の展開を 3 期に分け、一連の過程が能という世界において世阿弥が「自分らしさ」を実現していく過程と符合していることを認め、“わざの追求”における外的な変容と同期して“自分らしさを探求し続ける”ことによる内的な変化も生じていることが、ここでも確認されている。

3. 結論

以上の下位検討課題の結果より、本論文において著者は、「アスリートのコツ獲得過程においては、パフォーマンス向上や取り組み方の変化といった外的な変容に伴って、人格的な発達といった内的な変容が同期しながら生じていることが明らかとなった。そして、アスリートが“自分だけのコツ”や“自分にしかできないわざ”を追求することは、“自分らしさを探求し続ける”という個性化の過程でもあると言い換えられる。さらに、このような取り組みやコツ獲得体験はその後の人生にも強く影響し、アスリートの生涯発達という長期的な視点においても重要な意味を持つことが明らかとなった。」と結論している。

審査の結果の要旨

(批評)

これまでアスリートのコツ研究は運動学、バイオメカニクス、運動学習といった自然科学領域の主題となってきたが、本論文の成果は、新たな研究領域からのアプローチの可能性を示唆し、同時にアスリートにおけるコツ獲得に新たな意味づけを加えたことになる。また、スポーツ心理学の古典的課題とも言える「スポーツ経験とパーソナリティ形成」について、本論文は新たな知見を加えたことになり、アスリートのパーソナリティ研究における今後の取り組みに大きな、そして重要な推進力となっていくものと考えられる。さらに、本論文の成果は、アスリート自身だけでなく、彼らを支えている競技現場でのサポートスタッフやスポーツカウンセリングにおいて重要な示唆をあたえたことになる。今後は、アスリートの歩みに添った長期的なコツ獲得研究や、アスリートの心理臨床面接を通して、本論文で明らかにしたコツ獲得プロセスならびに個性化過程について、生涯発達の視点を踏まえてさらに検討することが期待される。

平成 29 年 2 月 8 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(体育科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。